

今から 30 年近く前、私が大学 4 年のときのことです。卒業論文の作成の中で、「あいのう野菜の会」を運営されていた片井義二氏に会いに春日部のお宅までおじゃまいたしました。「あいのう野菜の会」は生産者と消費者がつくる産直の会で、当時、奥様と二人で切り盛りされていました。生協のゼミにいた私は、片井さんが語られる野菜についての専門的な話は、始めて聞く事ばかりで、ほとんど理解できなかつたのですが、ただ、二十代になったばかりのわたしに情熱的に語りかける姿に、「自分も 50 歳、60 歳になったときに、目を輝かして夢を語れる生き方がしたい」と思いました。そして、そのことを片井さんに話すと、「生き方ではなく、生きることなんだよ」と、語られました。20 代の始めに出会ったこの言葉は、それ以降、私の心の中の中心にあります。

それから二年後、「あいのう野菜の会」の事務局が法人としてスタートすると同時に、私も一緒に働かせていただく事になり、10 年間をご一緒に過ごさせていただきました。忘れられない思い出はたくさんあるのですが、その中のひとつに、片井さんがまだ長野の農学校の学生だったときに、恩師の方から聞いた話があります。それは「野生に中で生きるヤギは、自らの力で、餌になる草と毒草とを見分けることが出来る。ところが、草を刻み、かいば桶に入れて出すと、ヤギは毒草でも食べてしまう」というものでした。「あいのう野菜の会」を始められる前、片井さんは種苗会社の技師として働いていました。当時、化学農薬の普及が始まった時期で、片井さんはその拡販の中にいました。「農薬の安全性を強調するために、日本国中をめぐり、農家の人たちを集めては、ワイシャツの袖をまくって農薬を撒いていた。すると、昨日まで一緒にげんき良く働いていた仲間が、次の日にはコロッと亡くなっている。それも 1 人や二人じゃないんだよ」。スーパーで何も知らずにキレイな野菜を手にする人たちが、片井さんは「かいば桶に刻んだ草を食べているヤギに思えてならない」と話されていました。

ただ、現在の JAS 認定有機栽培の制度の安全が片井さんの理想であったというわけではありません。それは、1976 年、発足間もない日本有機農業研究会の機関紙「土と健康」のインタビュー記事の中で片井さんが語られた、「いずれ日本のマーケットの中には無農薬という農薬のかかった無農薬野菜が氾濫しますよ」という片井さんのコメントが物語っています。それは、自然を無視した人間本位の安全性が、危険な農薬を野菜という食べ物にかけた論理で行われることへの警鐘でした。一貫して述べられているのは《農》と《食》とのかかわりの中で野菜の本質を見極めるということで、それは自然とのかかわりの中で生命の本質をみきわめるということであつたのではないかと思います。